第２回島根同窓会通常総会講演会

松江藩の教育－藩校・私塾・寺小屋－

2014 年４月 20 日（日）
会場　島根学習センター　３階　第一講義室
安部　登氏　（元松江郷土館館長）

今日は江戸時代の教育、特に松江藩の教育についてお話をします。

昔から教育は 100 年の大計といいますが、教育は昔も今も大変重要な課題であります。

江戸時代にはどのような教育が行われていたのかというと、大きく分けて藩校と私塾と寺子屋がありました。藩校は現在でいえば国立大学にあたるもので、松江藩の藩校といえば島根大学に相当します。藩校は指導者になる武士の子弟が学ぶ学校です。当時日本全国約 300 藩といいますが、どの藩にも置かれたものです。島根県でいいますと、松江藩、浜田藩、津和野藩、母里藩、広瀬藩で、それぞれ藩校がありました。中等段階の教育を行う私塾、一般庶民の子弟が学ぶ寺子屋。今日はこの三つの教育を出来るだけ保存資料に基づいてお話をします。お手元に①レジュメ、②藩校などの資料、③教科書のコピーと三種類お配りしています。

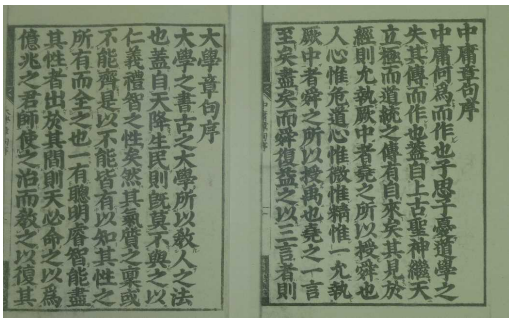
藩校に学ぶ武士の子弟

松江･千鳥城

最初が藩校です。武士の教育機関で、江戸時代の松江藩は堀尾氏が３代 30 年、京極氏が１代３年、松平氏が 10 代 230 年、合わせて 260 年が江戸時代です。宝暦 8(1758)年、今から約 250～60 年前に、初めて母衣町に藩校が出来ました。

しかし、最初から学校という建物はなく、桃源蔵(号は白鹿と言いますが)、この桃家に文明館という学校を作りました。六代藩主松平宗衍が江戸から呼び寄せて、母衣町に屋敷を与え最初の学校を開かせました。その後、七代藩主治郷は天明 4(1784)年に藩校名を「明教館」と変えます。

そのころの教師としては、桃西河。この人は西川津の生まれでその名前を取って名前にし、白鹿の養子になります。この頃の聴講者は 100 人から 200 人といわれています。松江藩の武士の子弟が藩校に学んだ数としては多いのではと一般にいわれています。



藩校明教館での教科書

資料１は明教館の学則です。今でいうと小学校１年生にあたる年齢で入学、そして初等から８等、７等に上がりますが、一番上が１等で 15、６歳中学３年くらいまでの学習内容です。教科書の写しは資料の１～４頁を

見て下さい。これを 6〜7 歳で読むわけです。大学、中庸、論語、孟子です。大学は朱子が書いた本ですし、孟子は孟子のことばで、論語は孔子が書いたものです。

藩校の正式な教科書です。６～７歳の子供たちが、これを十分読んで意味が分かるわけではありませんが、この文章を教師が読み、子供たちが後からついて読むわけです。そして 8 等か 7 等くらい、10 歳前後になると、教科書が春秋、詩経、易経、書経、礼記になる。これを合わせて五経といい藩校で武士の子弟が学んだわけです。このような教科書を使用して 200 年前から、既に松江でも勉強していたわけです。

次に文武館、これは十代藩主定安の時で、松江藩最後の殿様です。今の県民会館のあたりにあり閉館となりますが、渡辺寛一郎という雑賀出身の方が、県と交渉して江戸時代の教育の殿堂であった修道館の名を残したいと、明治 23 年に南田町に私立修道館を開校しました。その後、尋常中学修道館と改称され、さらに松江市立工業学校修道館となりました。

資料に修道館の内容がありますが、まず文化系では皇漢学・洋学・習書・算術。武芸では兵学・技能・操錬。医学では西洋医学・東洋医学を学んでいます。明治 4 年 5 月 4 日に諭達書を交付して修道館教育の目標を明らかにした学則を定めます。

そこで修道館教育の目標を表したのが資料 2 です。修道館は南学、北学、西学に分かれていました。7 歳で入学して基礎になるものを学びます。そして 16 歳で試験を受けて、南学、北学、西学のどれかを選びます。南学は皇漢学、北学は洋学、西学は医学です。

私塾での学びとは

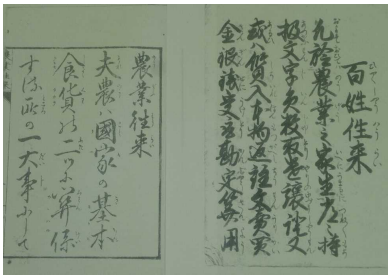
武士の子弟が学ぶ藩校と一般庶民が学ぶ寺子屋の中間にあるのが私塾です。寺子屋が初等教育だとすると、私塾が中等教育、藩校は高等教育です。島根大学の内藤先生は市内に私塾が 42 在ったと書かれています。では私塾ではどんな内容のことを勉強していたのか、まず学課では漢学（四書五経）、次いで読書、習字、和学、詩文など。教師は大体 1 名であるが、3 名以上のところもありました。代表的な私塾を三つ挙げると、１つは「養正塾」の雨森賢三郎(号を精翁)で、定安公の母方の姓を継いでいます。優秀で藩費で大坂に留学し、更に江戸の昌平校に入学。昌平校は江戸幕府が開いたものです。現在の東京大学です。藩命で帰郷し、今の内中原小学校がある場所で開きました。後に平田に移り亦樂舎を開き、学んだ有名な人は 80 代宮司の千家尊福、村田寂順(天台宗座主)、瀧川亀太郎(中国史記研究の世界的学者)です。

次いで「相長舎」の内村友輔(号を鱸香)で嘉永４(1851)年、町人であって江戸の昌平校で学びました。明治 7 年に西茶町で塾を開きます。門弟 3000 人、山陰第一の塾といわれています。学んだ有名な人は北尾次郎(東京大学の物理学の世界的学者)。若槻礼次郎(総理大臣）岸清一（日本スポーツの父)です。

三つ目が「培塾」、雑賀の沢野修輔(号は舎斎)、安政元(1854)年、江戸昌平校で学んだ方です。帰ってきて修道館の教授となり、安政２年に雑賀町で培塾を開き、明治 4 年に廃業するまで 650 人の子弟を教えました。門弟には政治家で経済人でもある岡崎運兵衛、渡辺寛一郎は、私立の尋常中学修道館をつくりました。明治 5 年に学校制度が出来ると沢野修輔が雑賀小学校の初代校長になります。一番古い小学校は平田小学校で明治 6 年 3 月、4 月

が雑賀小学校で２番目に古い学校です。

市井の寺子屋の教育は



資料 5～6　寺子屋の教科書

次に市井の寺小屋ですが、レジュメ２の寺小屋、庶民の教育機関を見て下さい。寺子屋については『日本教育史資料』に記載があります。これは明治 25(1892 年)に明治政府の文部省が江戸時代に全国にどれだけ寺子屋があったかを調査したものです。それをまとめたものが日本教育史資料です。その中に島根県下の寺子屋の数が 675 あります。この数字には隠岐は含まれていません。その中身ですが、出雲が 505、石見が 170 です。寺子屋は今でいうと小学校にあたり、一般庶民の教育機関です。『松江市誌』に松江の寺子屋の数が 56 と書いてあります。今島根県下の小学校は 209 です。当時松江にどれだけ寺子屋があったかというと資料 4 を見て下さい。町ごとに見て行くとなんといっても多いのが雑賀町で 16 あります。寺子屋で学んでいる生徒の数を見ると、雑賀町の松本宗四郎の寺子屋では男子が 180 人、女子 40 人となっています。

寺子屋の教育内容や方法は資料 5～8 頁です。寺子の年齢は 7 歳、8 歳から 14 歳、15 歳まで。就業年は短いもので 1 ケ年、普通 3 ケ年。教科書のコピーを見てもらうと、藩校のような立派なものではありません。寺子屋の師匠が自分で書いて子供たちに読んだり書かせたりしている。最初から論語のようなものではなく、師匠が書いたものを読んで写すわけです。名頭とか屋号など。これを写して読む。もうひとつコピーしたのが、百姓往来です。農業として必要な内容が書いてある。当時の教育資料によると謝礼はその家の資産に応じて現物が多く、米、麦、粟、小豆、大豆、樽、魚、熨斗鮑などで、なかにはお金を払う家もあったようです。寺子屋は藩校と比較して気楽に楽しく勉強したように書かれています。皆平等であり、勉強の程度によって人の頭になることはあります。寺子屋では現在の学校制度のように、内容と時間が一定していませんが、かなりの数の寺子屋があり勉強をしていたのです。学習時間は随時ですが、午前 8 時から午後 4 時頃までの間でした。読み、書き、算盤の基礎を寺子屋で学んでいたことで、識字力が世界一になったということです。

本格的教育は江戸時代から

明治の教科書

こういうことを考えると日本の教育は、江戸時代からまさに学力は優れたものであった。そして明治を迎えます。明治になると藩校・私塾・寺子屋はどうなるかというとそれがレジュメの４です。まず、明治４年５月４日に私塾と寺子屋をあわせて教導所となります。教育の内容は江戸時代とそう変わりません。次に郷校を１郡に１校を設置して教導所を統括しました。明治４年 10 月５日、松江県は女学校の制度を定めました。場所は学区制により、第一区は普門院、第二区は千手院、第三

区は外中原の神官宅、第七区は洞光寺でした。四区(茶町)、五区(東本町)、六区(白潟)は最寄りの学校に行くことになりました。女学校の教師は修道館の教師が担当しています。内容も江戸時代のものとあまり変わりません。江戸時代の教育が終わると、明治５年の新しい学校制度が出来るまでの過渡的なもとして、郷校と教導所ができたのです。

こうして、江戸時代には藩校・私塾・寺子屋という非常に層の厚い教育機関によって多くの人が学びました。江戸時代 200 年もの鎖国をしていて、明治になって日本は少なくとも西洋諸国より 100 年以上は遅れていたと思いますが、短期間に近代国家をつくることができたのは、江戸時代の教育の充実によるものです。（文責・石川直樹）

第２回通常総会の記念講演会（第一講義室）